日本映画オーラル・ヒストリー・プロジェクト

門間貴志
ローランド・ドメーニグ
斉藤綾子

「日本映画オーラル・ヒストリー・プロジェクト」は、日本映画の分野に携わってきた方々にインタヴューを行い、口述資料として収集・保存することを目的に、言語文化研究所の活動の一環として芸術学科の映像研究の教員が中心となり計画され、二〇一五年に第一回として映画プロデューサーの田口寧さんのインタヴューを掲載した（『言語文化』三二号を参照されたい）。

今回掲載する第二弾は篠田正浩監督のインタヴューである。監督の長年に亘るキャリアの中で、松竹時代から始まり、松竹を退社後、独立プロを立ち上げ活躍なさったが、特に松竹を退社するまでの前半の人生を語ってくださった。二回に及ぶ長時間のインタヴューに応じてくださった篠田監督に感謝したい。監督のプロフィールは次の通り。

篠田正浩監督は一九三一年三月九日岐阜市生まれ。早稲田大学第一文学部を卒業後、一九五三年に松竹大船撮影所に入所。一九六〇年『恋の片道切符』で監督デビュー。同年に寺山修司脚本の『乾いた湖』で

注目され、大島渚、吉田喜重とともに「松竹ヌーヴェルヴァーグ」の旗手と呼ばれた。一九六五年松竹を退社し独立する。一九六七年に女優岩下志麻と結婚、独立プロダクション表現社を設立する。表現社で『心中天網島』（一九六九年、ＡＴＧ提携）、『沈黙』（一九七一年）、『はなれ瞽女おりん』（一九七七年）など製作する。『鑓の権三』は一九八六年にベルリン国際映画祭で銀熊賞受賞。二〇〇三年、『スパイ・ゾルゲ』を最後に映画監督から引退。著書に『心中天網島―篠田正浩作品集』（仮面社、一九七〇年）、『闇の中の安息―篠田正浩評論集』（フィルムアート社、一九七九年）、『駈けぬける風景』（旺文社、一九八〇年）、『エイゼンシュテイン』（岩波書店、一九八三年）、『河原者ノススメ　死穢と修羅の記憶』（幻戯書房、二〇〇九年）などがある。株式会社表現社代表取締役、早稲田大学特命教授、日本中国文化交流協会代表理事、城西国際大学メディア学部客員教授なども務めている。